外国人として生きる

先住民アボリジニと共に、赤土の大地に暮らす

黒田 智子（くろだ ともこ）
Mbantua Gallery（ムバンチュアギャラリー）マーケティング・営業

世界最古のモダンアート

「ここに住んでるんですか？」このような質問を日本人観光客の方からよく受ける。わたしが暮らしているのは、オーストラリアのド真ん中、アリススプリングスという人口約二万八〇〇〇人の小さな町だ。東京ドームの収容人数の半分といえば、どのくらい小さい町か察していただけるだろう。

わたしはオーストラリアの先住民アボリジニが描くアボリジニアートをあつかっているギャラリーで働いている。初めてアボリジニアートを見たとき、感想が「何だこりゃ？」だった。というのも、とてつもなく抽象的な絵だからだ。点や線で描かれる絵が、まさかそれぞれ意味をもち、ストーリーがあるなど想像もしなかった。このアートについてもっと知りたい、どんな人が描いているのだろう、どんな歴史があるのだろう…そこからわたしのアボリジニアート人生が始まった。

ここで簡単にこのアートをご説明しよう。先住民アボリジニは文字をもたないので、はるかむかしから大地や岩に記号のような模様を描き、意思の伝達を図ってきた。例えば「ここに水場があるよ」などの情報から、法や掟などさまざまな事を先祖代々伝えてきた。その模様を独特で面白いと思ったイギリス人の美術教師が、キャンバスに描くよう指導したのが一九七一年のこと。まだ三六年しか経ってないのだが、今やアボリジニアートは世界が認める「世界最古のモダンアート」となったのである。

現地ギャラリーで働く理由

アリススプリングスのギャラリーで働いているのには大きな理由がある。アリスの周辺には、アボリジニの人びとが暮らす"コミュニティ"とよばれる村が多く点在しており、わたしが勤務しているムバンチュアギャラリーは、ブッシュで暮らすアーティストたちから直接絵を買い付けているので、彼らとコミュニケーションがとれるという大きなメリットがある。日本人のわたしは、もっている情報量が絶対に少ない。日本でのOL時代に学んだ「仕事は現場で覚える」という信念のもと、アリスで働くことを決意したのである。まず、彼らの生活、文化を知らないと、絵を理解できないし、売れないと思ったのだ。

もちろん、仕事では英語を使う。わたしのお客様は日本人だけではない。日本人が来る事なんて稀である。スタッフは全員オーストラリア人だし、アーティストと話をしようと思っても、アボリジニ語はまるで理解不能で宇宙人語のよう。しかし、彼らの絵に、注釈を入れた保証書は英語で作成しなければならず、アボリジニ語も理解しなければならない。どちらも中途半端なわたしは、他のスタッフの二倍、三倍勉強しなければならない。決して若くないわたしの脳は、むかしより確実に硬くなっており、悪戦苦闘の毎日である。しかし、日本人のわたしがこの地で職を得て、解雇されずにいるには、そのくらいしないと追いつかない。

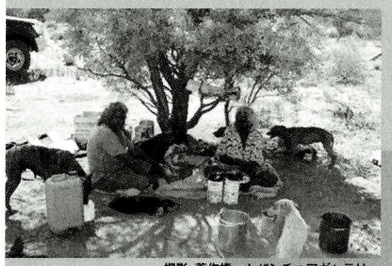
お客様は世界各国からいらっしゃるが、オーストラリア人も多い。ギャラリーで勤務をし始めたころ、自信の無さからか「日本人のわたしがオーストラリアの文化のものをオーストラリア人に売って良いのだろうか？」と、ずっと自問自答していた。もし、あなたが三味線を買いに楽器屋に行き、接客してくれた人が外国人だったら買うだろうか？自分勝手に出したわたしの答えは、「その人が商品知識もあり、仕事に情熱をもち、商品に愛着をもって販売していたら、国籍は関係なく買うのではないだろうか」だった。オーストラリア人のお客様から「なぜ、日本人のあなたがこの仕事をしているの？」と聞かれることがある。そうすると、ひるむことなくわたしは、アボリジニアートに対する熱い想いを語り始める。すると、大半の人は「それは素晴らしいことね、あなたの母国である日本にも是非この素晴らしい文化を伝えてちょうだい」と、ニッコリされるのである。

アーティストたちともだいぶ交流を図れるようになった。彼らは町の真ん中でわたしを見つけると「トモーコー」と人一倍大きい声で呼ぶ。とても嬉しい瞬間のひとつだ。彼らにすればわたしは外国人。発音し慣れない名前を一生懸命呼んでくれる。日本についても興味をもってくれる。わたしもしっかり彼らの文化や言葉を学ばなければ、と改めて心に誓うのである。

情熱とトライの精神で

去年、初めて彼らのおこなうセレモニー（儀式）に招待された。ブッシュに出向き、日が暮れると長老が歌い、女性たちが踊る。「オマエも一緒に歌って踊れ」と言われ、見よう見まねでトライ。わたしが踊るとなんだか盆踊りのようだ…。人懐っこい子どもたちが一生懸命教えてくれる。儀式が終わった後、長老からNo・1ダンサーと称され、明日もまた来いと言われた。やはり実践あるのみである。恥ずかしがっては何も得られない。外国で暮らすのは難しい、と思っている方は多いと思うが、情熱とトライの精神があれば結構乗り切れるものである。言葉はもちろん、文化や習慣は違って当たり前。要はそれをどう受け止め、吸収するか、だと思う。そんな偉そうなことを言うわたしも、日本食は恋しくて仕方がない…。

ギャラリーのホームページ　www.mbantua.com.au



ブッシュで暮らす
アボリジニたち

撮影・著作権　ムバンチュアギャラリー

ギャラリースタッフと寿司パーティー。
刺身が無いのでネタにも悪戦苦闘

ギャラリー1階。
2階は博物館

ブッシュでは週1度の移動販売がある。
食料や衣類、日用品など何でもそろう

アリス在住の日本人は皆、仲良し